

2026 年 5 月

妥協なきソブリン AI：コントロール、オープン性、スケーラビリティ

マーク・ベキュー、AI 担当プリンシパルアナリスト

要約： AI 主権とは、管轄境界内における AI モデル、データ、インフラ、ガバナンス、および実行時の意思決定に対するコントロールを指します。本ショーケースでは、ソブリン AI を企業および国家のテクノロジー戦略の最重要課題へと押し上げている市場要因を考察するとともに、ハイブリッド環境や複数拠点にまたがる環境において AI を管理する際に組織が直面する新たな課題を探ります。また、実行時ガバナンス、実証可能な運用管理、継続的コンプライアンス、オープンかつハイブリッドなアーキテクチャといった、効果的なソブリン AI アプローチに求められる中核要件について整理します。

Sovereign Core により、IBM は、柔軟性や信頼性を損なうことなく、コントロール、説明責任、拡張可能なイノベーションを実現する、AI 対応のソブリン環境を提供する有力な選択肢を提示しています。

はじめに：AI は主権の新たな定義を迫っている

テクノロジー主権は、デジタルインフラやプラットフォームの管理に焦点を当てたデジタル主権から、データがどこに保存、処理、管理されるかを重視するデータ主権へと進化し、現在では、AI モデル、学習データ、アルゴリズム、計算能力、意思決定の自律性に対するコントロールにまでその関心を拡張した AI 主権へと発展しています。

ソブリン AI とは、特定の国や地域が、データガバナンス、AI モデルの開発、インフラの所有、規制の枠組みを含む AI エコシステム全体に対して自律的なコントロールを維持する能力を指します。これには、国内の AI 能力の確保、管轄上の利益の保護、および国外の AI 技術やサービスへの依存の低減が含まれます。

市場動向

多くの市場において、ソブリン AI は、イノベーションと規制対応やデータ管理の要件とのバランスを図ろうとする企業にとって、重要な戦略的優先事項として急速に注目を集めています。この動きを受けて、組織は多額の投資を行っており、その結果、投資対効果を明確に示すための堅牢なビジネスケースの策定が求められています。企業は、ソブリン AI によって、コンプライアンスの加速やセキュリティの向上、機密データや AI 機能に対するコントロールの維持が可能になることを期待しています。これは、市場全体での優先度の高さや数百万ドル規模の資金投入といった裏付けに見られる強い市場の勢いを意味しており、リスク低減、データ主権の確保、ガバナンスの効率化といった明確な推進要因と相まって、その動きが加速しています。

大きな勢い

企業はソブリン AI の導入と投資を急速に進めています。回答した組織の大多数（81%）が、ソブリン AI を自社の最重要戦略的テクノロジーの上位 3 つの 1 つに位置付けています。¹さらに、41% は、今後 12 ヶ月間にソブリン AI イニシアチブに 100 万ドル以上を割り当てると回答しています。

ビジネスおよびその他の市場要因

ソブリン AI の勢いは確かに規制によって後押しされていますが、企業はソブリン AI を自社の保護手段としても捉えています。多くの組織（65%）が、ソブリン AI イニシアチブの推進において、セキュリティとリスク軽減（例：機密データや知的財産の保護）が非常に重要な要因であると回答しました。また、63% は、データ主権とコントロール（例：機密情報を特定境界内に保持するためのデータ処理、保存、AI モデル学習の管理）が非常に重要であると回答しています。

期待

企業は、ソブリン AI が市場投入までのスピードなどの競争優位性をもたらすと考えています。回答した組織の 3 分の 1 以上（36%）が、ガバナンスの効率化（例：自動化された主権チェックや監査証跡により、手動でのコンプライアンス作業が不要になる）を期待しています。また、37% は、あらかじめコンプライアンス機能が組み込まれたソブリン AI フレームワークにより、AI の導入がより迅速になると見込んでいます。

ソブリン AI の管理における課題

ソブリン AI の複雑さにより、組織はガバナンス、コンプライアンス、リスクに対して、単一の主導的な戦略ではなく、複数のアプローチを並行して追求する必要に迫られています。AI のワークロードがさまざまな環境に分散しているため、企業は、ケースバイケースでデータの所在、パフォーマンス、規制要件のバランスを取る必要があります。さらに、これらの課題は、レガシーのアイデンティティシステム、データアーキテクチャ、インフラ、AI パイプラインに起因する累積的な摩擦によってさらに複雑化しています。その結果、組織は、市場の進化に応じて、ポリシーフレームワーク、技術的統制、運用プロセスを順序立てて組み合わせるとともに、ガバナンス手法を積極的に試行していく必要があります。

- 組織は、規制要件、イノベーションへの圧力、そして管轄区域、ワークロード、ユースケースによって異なる運用上の現実に対応するため、ソブリン AI のコンプライアンス、ガバナンス、リスクの管理において、複数のアプローチを並行して活用することを見込んでいます。
- ソブリン AI は、その性質上、複数の場所にまたがって存在し、データの所在、パフォーマンス、規制要件に応じて、パブリッククラウド、ソブリンクラウド、プライベート環境、オンプレミス環境にワークロードが分散しています。

¹ 出典：Omdia Research Report, *The Great Repatriation: Why Enterprises Must Act Now to Ensure AI Sovereignty*（2026 年 5 月）本ショーケースに記載されているすべての Omdia の調査資料および図表は、本レポートに基づいています。

- 統合に関する課題はソブリン AI の複雑さをさらに高めている：レガシーシステムが導入を遅らせる原因は、単一のボトルネックにあるのではなく、アイデンティティ、データ、インフラ、AI パイプライン全体にわたる累積的な摩擦にあります。

回答者は、ソブリン AI の導入における最大の課題について尋ねられ、13 の選択肢が提示されました。

- 16% は、セキュリティとサイバーリスクの管理を挙げました。
- 11% は、データ品質の確保（例：高品質で多様なローカルデータの確保）を挙げました。
- 8% は、AI システムを各地域の法規制や倫理に適合させるために必要なカスタム開発を挙げました。

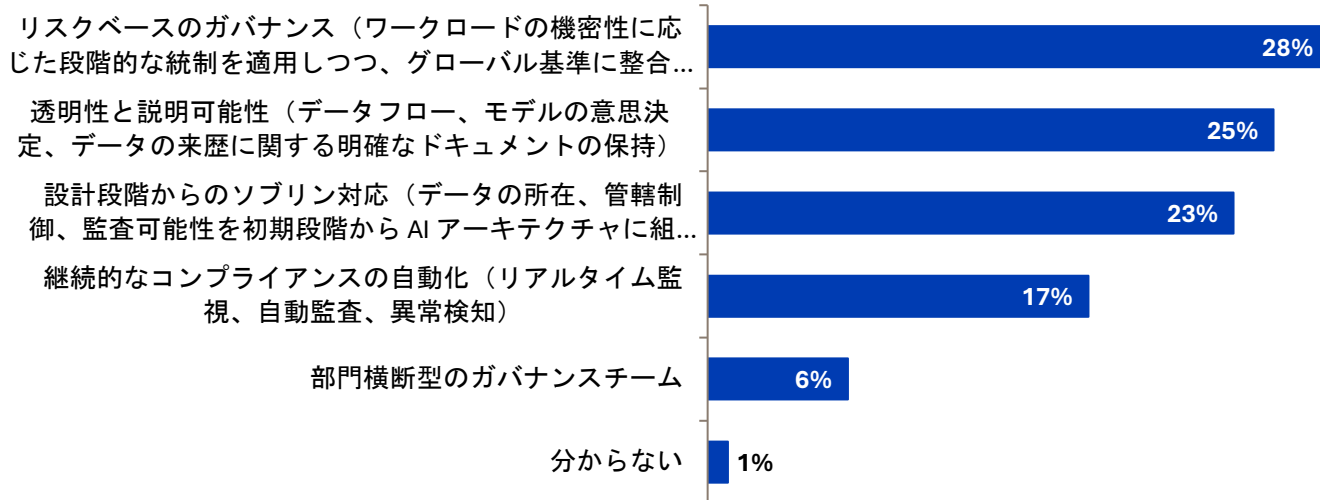
ガバナンスにおいて単一の支配的な戦略は存在しない

回答者には、ソブリン AI のガバナンスに対応するために自組織が活用している、または活用を検討している最も重要な戦略について尋ねました（図 1 参照）。企業は、上位 4 つのソブリン AI ガバナンス戦略の間でほぼ均等に分かれていました。これは、各戦略がそれぞれ異なる重要なガバナンス上のリスクに対応しているためです。さらに、組織ごとに出発点や成熟度が異なること、支配的なガバナンスの「コントロールプレーン」がまだ存在しないこと、企業は（排他的ではなく）段階的な導入を重視していること、そして規制要件が依然として具体的というよりは広範なものであることが背景にあります。

本データが示しているのは、ソブリン AI のガバナンスを構成する要素については市場全体で合意があるものの、どの要素を主軸とすべきかについては依然として試行錯誤の段階にあるという点です。規制がより厳格化され、執行のパターンが明確になるにつれて、この分布は収束していく可能性があります。しかし現時点では、不確実性に対する合理的な対応として、戦略の多様化が採られている状況です。

図 1 ソブリン AI ガバナンスの戦略

ソブリン AI ガバナンスに対応するために、貴組織が活用している、または活用を検討している最



出典：

© 2026 Omdia

出典：Omdia

適切なアプローチ

組織は、ソブリン AI の管理を、AI の構築、運用、リアルタイム制御の方法を統括するエンドツーエンドの運用モデルとして捉える必要があります。真の主権とは、プロバイダー主導ではなく顧客主導の環境を意味し、コントロールが管轄内に完全に留まり、契約上の主張にとどまらず継続的に実証可能である状態を指します。これにより、ガバナンスは従来の定期的なレビュープロセスから、AI システムに直接組み込まれたランタイムでのコントロールへと転換します。これを達成するために、組織はオープンでハイブリッドなアーキテクチャと、AI のライフサイクル全体にわたる統合されたソブリンコントロールプレーンを採用する必要があります。

主権はデータにとどまらず、AI のランタイムおよび運用にまで及ぶ必要がある

デジタルおよびデータの主権に関する従来のアプローチは、データが保存される場所だけに焦点を当てており、コントロールプレーン、管理者アクセス、AI の意思決定がソブリンの境界外に置かれてしまうため、不十分です。AI 主権はランタイム要件であり、導入時にとどまらず、AI の稼働中におけるモデル学習、推論実行、エージェントの挙動、ガバナンス全体を対象とするものです。

ソブリン AI はプロバイダーではなく顧客によって運用される必要がある

ソブリン AI は、顧客（またはソブリンオペレーター）が完全な運用権限を保持する、顧客主導の環境を重視します。アイデンティティ、認証、認可、暗号鍵、機密情報、ログ、監査データは、すべて管轄内に保持されます。AI システムの導入、変更、ガバナンスにプロバイダーの介入は必要ありません。

主権は強制可能であり、かつ継続的に証明可能でなければならない

主権は、契約やポリシーに基づいて推測されるのではなく、証拠によって示される必要があります。組織は次のように問われることが増えています：誰がプラットフォームを管理しているのか？誰が管理アクセス権を持っているのか？実際の運用はどこで行われているのか？必要に応じて証明を提示できるのか？その答えは、プラットフォーム自体に継続的なコンプライアンスと証拠収集の仕組みを組み込むことにあります。

AI ガバナンスは後付けではなく、ランタイムで適用されなければならない

AI ガバナンスは、モデルやエージェントの実行中に適用される、システムの中核的な特性として設計する必要があります。これには、推論がどこで実行されるかの統制、モデルやエージェントへのアクセス権の管理、追跡可能な意思決定ログの自動取得、さらに AI エージェントやワークフローがソブリンの境界内で完全に動作することの確保が含まれます。これは、ガバナンスが、レビュープロセスからリアルタイムの運用上の統制へと転換することを意味します。

主権にはオープンでハイブリッドなアーキテクチャが不可欠

ベンダーロックインは独立性を損ないます。組織は、異種のハードウェア、インフラ、モデル、エージェントをサポートするオープンソースおよびオープン標準を採用すべきです。これにより、オンプレミス、ハイブリッド、リージョン内環境を問わず、顧客の選択肢を確保し、主権の保証を損なうことなくコンポーネントを置き換えることができます。

ポータビリティ

ポータビリティは、組織がベンダーやセカンダリーレイヤープロバイダー間でワークロード、モデル、コントロールを迅速に移行できるようにすることで、オープンなアプローチを拡張します。これにより、依存関係が変化しても再設計を行うことなく主権を維持することが可能となります。切り替え時の摩擦を最小限に抑えることで、ポータビリティは長期的な独立性を確保し、集中のリスクを低減するとともに、顧客が地政学的、規制上、または技術的な変化に対して、コントロールを手放すことなく迅速に対応できるようにします。

ソブリン AI はライフサイクル全体をカバーする必要がある：構築、実行、ガバナンス、最適化

完全なソブリンコントロールプレーンは、セキュアなオーケストレーションおよび運用と、アイデンティティ、ポリシー、ゼロトラストの適用、AI モデルおよびエージェントの導入・推論・可観測性、継続的なコンプライアンス・監査・リスク管理、さらにコスト・利用状況・運用の可視化を統合します。これは単なるオーケストレーションを超え、主権をエンドツーエンドの運用アーキテクチャとして定義するものです。

IBM Sovereign Core を選ぶ理由

IBM Sovereign Core により、主権は契約上の保証や導入上の選択肢ではなく、プラットフォームに組み込まれた、強制可能かつ証明可能な機能となります。このアプローチは、実運用における AI の現実に対応するように明確に設計されています。ランタイムにおいて、コントロール、ガバナンス、および説明責任が存在しなければなりません。

ソブリン AI は後付けではなく、アーキテクチャに組み込まれるべきもの

IBM Sovereign Core は、プラットフォームアーキテクチャに権限、ガバナンス、コンプライアンスを直接組み込むことで、AI ワークロード、モデル、エージェント、および意思決定が、顧客の管理下にある明確に定義されたソブリンの境界内に確実に留まるようにします。

プロバイダーのバックドアがない、顧客主導のコントロール

IBM Sovereign Core では、クラウドプロバイダーではなく、顧客またはソブリン運用者が環境を運用およびコントロールします。アイデンティティ管理、認証、暗号鍵、機密情報、ポリシー、ログ、監査データはすべて、管轄境界内に留まり、顧客の権限下に置かれます。本ソリューションは、プロバイダーによる管理者アクセスへの依存を排除し、組織が自らの AI システムを真にコントロールできるようにします。

ランタイムで強制される AI 主権

モデルのトレーニング、推論の実行、エージェントの動作、意思決定のすべてがソブリンの境界内で行われ、AI の実行中も継続的にガバナンスが適用されます。ガバナンスポリシー、アクセスコントロール、意思決定ログ作成がランタイムにおいて強制され、設計時および運用時に AI のソブリンコントロールを保証します。

信頼ベースではなく継続的で証明可能なコンプライアンス証跡

IBM Sovereign Core は、事後的にコンプライアンス証跡を再構築するのではなく、システムの稼働中にログ、トレース、意思決定記録、運用テレメトリを自動的に収集します。これにより、組織は必要に応じてコントロール、ガバナンス、コンプライアンスに関する監査対応可能な証拠を提示できるようになり、規制リスクを低減するとともに、手作業による監査の不備を排除できます。

設計段階からオープン、ハイブリッド、ロックインフリー

Red Hat OpenShift などのオープンソース基盤上に構築された IBM Sovereign Core は、オンプレミス、ハイブリッド、リージョン内アーキテクチャ全体にわたり、異種のインフラ、モデル、エージェント、および導入環境をサポートします。これにより、顧客の自立性が守られ、既存の投資が保護されるとともに、特定の技術への依存を回避できます。

大規模な AI ライフサイクル全体のコントロール

IBM のアプローチは、導入やオーケストレーションから、ガバナンス、可観測性、最適化、監査に至るまで、AI のライフサイクル全体を対象としています。これらの機能を単一のソブリンコントロール

プレーンに統合することで、IBM は、組織が AI を個別の実験としてではなく、重要なインフラとして運用できるように支援します。

結論

ソブリン AI は、実運用において AI がどのように設計され、ガバナンスされ、コントロールされるべきかについて、組織に再考を迫るものです。現在、組織は明確な選択に直面しています。断片化されたガバナンス手法への適応を続けるのか、それとも、大規模なコントロール、説明責任、柔軟性を提供する統合的なソブリンコントロールプレーンを確立するのか。今こそ、オープンでハイブリッドかつ顧客主導で運用されるソブリン AI プラットフォームの採用に踏み出すことで、組織は規制リスクを低減し、戦略的な独立性を維持しながら、信頼と確信をもって AI のイノベーションを解き放つことができます。

著作権表示および免責事項

ここで参照されている Omdia の調査、データ、および情報（以下「Omdia の資料」）は、TechTarget, Inc. およびその子会社または関連会社（以下、総称して「Informa TechTarget」）またはその第三者データプロバイダの著作権で保護された財産であり、Informa TechTarget が公開したデータ、調査、意見、または見解を表しているものであり、事実の表明ではありません。

Omdia の資料には、本文書の日付ではなく、本書の発行日以降の情報と意見が反映されています。Omdia の資料に記載されている情報および意見は、予告なく変更されることがあり、Informa TechTarget は、結果として Omdia の資料または本書を更新する義務または責任を負いません。

Omdia の資料は、「現状」および「利用可能な状態」で提供されます。Omdia の資料に含まれる情報、意見、結論の公正性、正確性、完全性、または正確性に関して、明示または黙示を問わず、いかなる表明または保証も行われません。

法律で認められる最大限の範囲で、Informa TechTarget およびその関連会社、役員、取締役、従業員、代理人、および第三者のデータプロバイダは、Omdia の資料の正確性、完全性、または使用に関して、いかなる責任（過失または過失から生じる責任を含むが、これらに限定されない）も否認します。Informa TechTarget は、いかなる状況においても、Omdia の資料に基づいて行われた、または Omdia の資料に依存して行われた取引、投資、商業、またはその他の決定に対して責任を負いません。

お問い合わせ： www.omdia.com askananalyst@omdia.com

